



Closed Field



井田和樹

刺激臭を放つ透明な液体に、赤い色が混じる。

パラポラアンテナのような機器を後部荷台に取り付けた大型車の燃料タンクから、粘性の高いエタノール燃料が少しずつ滴り落ち、ハンドルに突っ伏したままぴくりとも動かない運転手の血と混ざり合っている。後方では拳大の穴を無数に穿たれた大型電源車が、松明のように音もなくめらめらと燃えている。

遠く遙かからサイレンの音が聞こえる。

穏やかな風が吹き、赤煉瓦の上に滴る鮮血の表面に、微細な波を立てた。

平生なら散歩を楽しむ家族連れやカップルでにぎわうはずの噴水前広場は、今や大型テントが立ち並び防弾チョッキを着た警官たちが早足で行き交う即席の作戦本部と化していた。テントの入り口で誰何の声が上がリ、多少のやりとりがあった後で通される。

「どうも、皆さん。お疲れ様です」

甲高すぎて場にそぐわない、コミカルでさえある声がテントに響いた。入ってきた男は自衛軍の制服を着てはいるものの、背が低く、痩せて、お世辞にも洒落ているとは言えないデザインの黒縁眼鏡をかけている。つまり軍人には見えない。

傍らにはタブレットを小脇に抱えた若い女性士官が付き従っていた。男より頭半分ほど背が高く、北国の出身なのか色が白く、睫毛が長い。

「……やはり、あんたの出番か。棟方志郎中佐殿」

周囲の隊員たちとブリーフィングを行っていたSAT隊長――胸の名札には「神山」とある――が顔を上げた。その声は苦々しくはあったが、どこかほっとしたようでもある。

「ご無沙汰しております、神山武治SAT隊長。先日はお世話になりました」

「そろそろ来るんじゃないかと思っていた。暴れているのが『例の連中』なら、呼ばれるのもあんたの部隊だろうとな」

「例の連中、と言いますと？」棟方は小首を傾げた。顔つきは大真面目だが、人によってはふざけていると見られるかも知れない傾げ方だ。

「今のところ、彼らの身元に関する手がかりはない……こちらの呼びかけにも一切応じないどころか、何の要求も出していないんだからな。だが共通する匂いはある。先日の『研究所占拠事件』と同じ匂いだ」

「情報がないかぎり、僕の立場からは迂闊なことを言えません。状況はどうなっています？」

「正直言って、膠着状態だ」

心底苦々しげに、神山は卓上の市内見取り図を指差しながら説明をし始めた。「住宅街中心部・市民ホールに通ずる歩道と民家に、正面・右斜め・左斜めの三箇所から歩兵と自動銃座から成る火点を据えている。あんたらの言葉で言えば『キルゾーン』か、射界に隙間はない。不用意に近づけばすぐさま銃弾とグレネードが飛んでくる。しかもうちで把握できている火点はここだけだ。他にどんな火器が持ち込まれているやら、見当もつかん」

「ははあ、ちょっとした要塞ですね」

場にそぐわない朗らかすぎる声に周囲のSAT隊員たちがむっとした顔になるが、棟方は気づいた様子も――あるいは気にする様子もない。「ですが……確かSATにも、最近配備された非殺傷用のマイクロウェーブ照射車があったのでは？ あれを使えば、犯人たちの捕縛は可能ではないですか？ 人質を傷つける心配もありませんし」

「もちろん、ある……いや、あったさ」

神山は重苦しい表情で、背後の黒煙を指差した。「使った結果があれだ。最近のミサイルには、マイクロウェーブの照射源に向けて飛ぶものまであるらしいな」

「なるほど、対レーダー波用ミサイルと同じですか。そんなものまで持ち込まれているとは」

「そう、奴らがこちらの装備と戦術を知り尽くしているということだ。運転手と操作員は搭載車ごと粉微塵、助けようとした警官まで銃撃を受けて2人重態だ」神山は歯の間から搾り出すようにして息を吐いた。「そんなものが出てきた時点で、我々SATは独力での解決を断念せざるをえなかった。SATが相手取るのは銃器で武装した犯罪者であって、軍と遜色ない装備と錬度を備えた武装集団ではないからだ」

ふむ、と頷きながら棟方は顎に手を当てる。「装備や兵力の配置はまずまずだが……『研究所占拠事件』の連中に比べると、UAVへの欺瞞がかなり稚拙ですね。赤外線遮断シートどころか、カムフラージュネットも使っていない。正面火力を重視したか、訓練と準備にかける時間を惜しんだか」

「馬鹿にはできない。自動銃座搭載の重機関銃相手では、うちの隊員が装備しているボディアーマーなぞ紙切れ同然だからな」

「なるほど確かに馬鹿にはできない。だが方法はある」

毛ほどの懸念も気負いもない声で――なさすぎる声で、棟方は言った。「正面から駄目なら、上から攻めましょう。無人機による空爆で仕留めます」

「空爆……か」神山は早くも鼻白んだ顔になっている。

「イスラエルのようにブルドーザーで建物ごと破砕できれば、まだ楽なのですがね。どのみち銃撃戦が発生した建物なんて取り壊すしかないでしょうに。まあ、建物よりも人命を惜しんでくれるのはありがたいですが」

「……やはりあんたらとは、発想が違うよ」ついていけない、と言わんばかりの声で神山は呟く。

「何、人質の命より目標の命を重く考えることはできないというだけですよ」

神山は目を上げて棟方を見据えた。「君たちは――君たちなら、勝てるんだろうな？」

「無論です」

「『研究所占拠事件』の時に比べると、警察もずいぶんと率直になったもんだね」

「少なくとも人間に対する口の聞き方は、してくれるようになりました」

テントを後にした棟方について歩きながら、女性士官――穂摘悠理少尉が口を開いた。平板な口調だが、にじみ出る皮肉さは隠し切れていない。

「……穂摘少尉、もしかして怒っているのかい？」

「私ははっきり覚えています。以前あのSAT隊長が、棟方中佐に何を言ったのか」

「彼らの立場もわからなくはないよ。誰だって自分の縄張りを他人に荒らされたくはない」

「理解はできますが、その苛立ちを中佐にぶつけるのはお門違いもいいところでしょう。私たちは国防省長官と内閣総理大臣の命令で出動しただけなのに」

「僕がどう言われようと痛くもかゆくもないけど」棟方の微笑は崩れない。何がそんなに嬉しいのか、と問いたくなるような笑顔だ。「君が僕のことで怒ってくれるのは、悪い気分じゃないな」

「……私の気持ちなんて、この際二の次にしてください」悠理は軽く咳払いをした。

「そろそろ任務の話をしようか。なに、いつもと同じく、為すべきことを為すだけだよ」

「はい」

2人は潰れた亀を思わせるオリーブドラブ色の8輪駆動トレーラー……指揮通信車の前に立つ。圧縮空気の漏れる音とともに後部ハッチが黒々とした口を開き、2人を飲み込んだ。

20ミリ機関砲を前方に突き出した6輪駆動の機動戦闘車が、次々と赤レンガ敷きの広場に停車する。

後部ドアが開放された。次々と下車していくのは、近接戦闘用のカービン銃や分隊支援火器、対物ライフルを手にした自衛軍のシステム歩兵小隊だ。HUD内蔵の防弾ヘルメットとボディアーマーに身を固め、背中にはウェアラブル・コンピューターと予備バッテリーを背負い、四肢に強化外骨格を装着したその姿は、周囲の機動隊員やSAT隊員たちですらたじろぐほど剣呑なものだった。ヘリと車輛の立てる轟音の下で、不安げなどよめきが広がっていく。

「〈アジサシ〉群、キャリアから射出開始。上空200にてクラウド形成開始。航空局へのフライトプラン承認済み」

――指揮通信車の中、正面ディスプレイを前に報告を聞いた棟方が頷く。傍らでは副官の奈良橋一哉中尉が指揮管制システムと各員のバイタルチェックに忙しい。「コンダクター1、コンダクター2、自律特車群とUAV群のデータリンクチェック開始」

インテリアの陰影を残らず取り除くほどに、白々と明るく照らされた車内。右手にC1分隊の穂摘悠理・宮迫小鈴、左手にC2分隊の坂本剛司・橘美晴が座る。棟方を除く全員が、網膜投影式ディスプレイ内蔵のヘルメットで頭部を覆い、ヘッドレスト付き対衝撃シートに身を沈めている。その有様は電子化・無人化が進む自衛軍の車輛でも特に異質で、口の悪い自衛軍将兵から「拷問部屋様式のクリーンルーム」と陰口を叩かれるほどだ。もっともそれをこの光景の主である棟方が気にした様子はない。

頭部アクセス薄層光電変換神経イメージングシステム、などという誰も正式名称で呼びたがらない網状センサー群を内蔵したヘルメットは、装着者の興味、警戒、ストレス、疲労などの情動を認識し、それに応じて戦術ネットワークが収集してくる情報のタイプや量を調整してくる。戦場の高速化・ネットワーク化とともに兵士一人ひとりが扱わなければならないデータは増大する

一方であり、個々の処理能力や精神状態に合わせ情報量を「カスタマイズ」化して伝達してくるこのデバイスは必要不可欠なものとなりつつある。もっともそれはその時々々の精神状態をリアルタイムで上官に――この場合は棟方および奈良橋に――把握されることを意味するものであり、部隊の全員が慣れるまでにだいぶ時間がかかった。

各分隊の動きを抽象化して伝える戦術マップとは別に、スクリーン上に別ウィンドウが開く。まるで金属製の蜂の巣のようなハニカム構造の専用カタパルトから、鈍く輝く金属の塊が高空へと打ち出されていく様子が映し出される。

【〈アジサシ〉群、上空200にてクラウド形成進行中。データリンク、セルフチェック問題なし】

「結構。次、自律特車群、キャリアから降車開始」

かつての新戦術実験部隊では主力であった「自律特車」は、現在ではより大きな兵器システムの一角を占めるユニットの構成単位に過ぎない。その主な役割は歩兵部隊への火力支援と同時に、敵の火線に身をさらし、その火点を探り出すための、言わば囷であり、勢子である。

都市迷彩を施された車体が荷台から降りるたびに、専用の輸送トラックが重量から解放されてサスペンションをきしませる。

カメラが切り替わり、展開中のシステム歩兵たちに、タイヤを転がして自律特車の群れが騎士に寄り添う従者よろしく付き従う様子を映し出す。歩兵の一人が親愛の情を示すためか、グローブの手の甲で自律特車のボディを軽く叩くのが見えた。

自律特車と随伴歩兵からなるC1・C2各分隊が、事前に特定された敵火点間近までさしかかった。攻撃を受けた際の被害を最小限にするため、棟方の指示でまず自律特車が先行する。

自律特車がごろごろとタイヤを転がして目標手前の十字路に踏み込んだ途端、間髪入れずに攻撃が始まった。正面瀟洒なオープンカフェの2階テラスで閃光が走り、次の瞬間、金属の雨を浴びたように自律特車のボディが無数の火花を散らした。生身の人間なら即死しかねない機銃掃射。小銃による狙撃も混じっている。

【C1、エンゲージ。損害軽微、戦闘情報来ます。……前方オープンカフェ2階部分に敵一個小隊が展開。自律式銃座2基を確認。機種はロシア製〈ザスターヴァ〉。音紋照合完了。敵使用火器はKord重機関銃、およびAK-107】

「やはり、『研究所占拠事件』と同じ手口か……」

【立て籠もるのがただの民家やオフィスの一室でも、自律式のタレットを設置した上に、壁を速乾性の補強材で強化すれば、お手軽なトーチカの一丁上がりですからね】

「率先して潰せ。どうせ対電磁コーティング済みだ、EMPは効果がない。実弾の使用を許可する。弾種、徹甲焼夷」

【了解。弾種徹甲焼夷。3点バースト、仰角45度、範囲35度で5秒間の制圧射撃開始】

「撃て」

自律特車の機銃が鎌首のように持ち上がり、腹に響く轟音とともに射撃を開始した。銃身の跳ね上がりを抑えるための断続的な3点バースト射撃だったが、オープンカフェ2階部分の窓ガラ

スが直撃弾と衝撃波で残らず砕け散り、外壁が一瞬にして拳大の穴だらけになった。設置されていたタレットは踏まれた空き缶のように潰れた金属塊と化し、周囲の人体がちぎれて壁や床に飛び散った。

【敵小隊、沈黙】

「準戦闘態勢へ移行。前進」

棟方の口調は、いつも通り微塵の屈託もなかった。

C 2 分隊少尉、坂本剛司は最近、人生の珍妙さを噛み締めることが多い、

入隊時、彼の志望は機甲部隊だった。理由は単純——戦車はカッコいいからである。強靱なキャタピラで泥地だろうと砂地だろうとあらゆる悪路を走破し、ぶ厚い装甲で敵の機銃掃射を跳ね返し、強力な火砲と機銃で敵の火点を確実に粉碎していく。まさに陸戦の花形！

だから適性検査ではねられた時は本気で落ち込んだ——不当だとは思わなかった。自分で認めざるを得ないほど、彼は乗り物酔いにめっぽう弱かったのである。乗用車程度なら何とか我慢できても、荒波の中の小舟のように揺れる戦車や装甲車となるともう駄目だった。昔よりサスペンション技術は発達しているといってもれっきとした不整地車輦である以上、そんなことは何の慰めにもならなかったのだった。

納得したからこそ、落胆した。戦車に乗れないくらいなら軍を辞めようかと本気で思ったほどである。そうしなかったのは指導教官に諭されたからだった。機甲部隊は無理でも、できるかぎり君の要望に近い部隊へ配属できるようにする、だから諦めるな、と。

確かに約束は守られた。ただし、ずいぶんと奇妙な形で、ではあったが。

——まさか電極とコードが山ほど付いたおかしなヘルメットをかぶって、リモコン戦車の操縦をする部隊だとは思わなかったぜ、と坂本は思う。詐欺だと怒るか、確かに間違っちゃいないと納得するか、微妙なところではある。

とは言え坂本は公務員であり軍人である。俸給をもらっている以上は好き嫌いで任務には当たれないし、眼前の任務に集中することに異存はなかった。それに棟方志郎中佐は、やたらと人を煙に巻く言動が鼻につくとは言え、これまでの上官の中ではまあ公明正大な人物と言ってよかった。彼に拾われるまでは冷や飯食いに近い日々であったこともあるが。

現在、彼の指揮下にあるのは3台の自律特車、それを上空から監視する2機のクアドローターUAV〈タゲリ〉である。各機の制御は半自律式であり、操作自体は進行ルートの設定と火器管制（つまり発砲するか否かの判断）が主である。自律特車に期待されている役割は囷であり勢子であり、そのプレッシャーは直接火線に身をさらす歩兵となんら変わるものではない。加えて随伴歩兵との共同行動であるから、彼らに対する脅威の監視（加えて排除）にも責任を担うことになる。決して楽な任務ではない。坂本の額に粘り脂汗がにじむ。

【こちらC 1、街路を北進中。動体センサー及びFRIRに敵影なし。送れ】

【こちらC 2、こちらも異常は……】

坂本の耳を耳障りな警報音が打ったのはその時だった。

【3時の方向、レーザー照射警報！ 前方の歩道橋直上、 対戦車誘導弾！】

自分の声が極限まで張りつめるのがわかる。【防御システム、セミアクティブ！ 各歩兵分隊、備えろ！】

自律特車に装備されたアクティブ防御システムが作動、車体上部のペレット射出システムが励起状態に移る。

発砲のタイミングは棟方から各分隊長に一任されており、判断を仰ぐ必要はない。坂本は自律特車からロケット弾を発射する。GPS誘導による「長距離狙撃」にも近接目標への無誘導照準にも対応可能な新型弾頭。轟音とともに、歩道橋そのものが人体を巻き込んで崩壊する。

【歩兵分隊よりC2へ、被害なし。感謝する】

手が使えればヘルメットを外して汗をぬぐいたいところだ。【C2より歩兵分隊長へ、例には及ばない……】

突如、坂本の視界の一部が欠けた。比喻ではなく、HUDに投影されるウィンドウの一部が本当に砕け散ったのだ。もちろん苦痛はなかったが、思わず坂本は自分が撃たれたように椅子の上で硬直した。

【発砲音！ こちらC2、大口径ライフルによる狙撃！ タゲリ2からの信号、途絶！】

【CMよりC2、集音センサー反応は？】

【同時数箇所から反応！ 2時、5時、7時方向。こちらからでは音源を特定できない！】

【上空のチョウゲンボウが位置を割り出しました】

坂本の焦燥を一挙に冷ます、やや幼く響く声が耳を打った。

【データ解析完了。2時と7時は音響装置によるデコイ、本命は5時方向からの狙撃です。こちらで対処します】

坂本の視点、無事な視界の上空を黒く小さな点が猛スピードで通過した。間髪入れずに狙撃地点とおぼしき雑居ビルが、窓という窓から爆炎を噴き出した。

【そちらから射線さえ通れば、間接照準が行えます。……しっかりしてくださいよ坂本少尉、『視界を借りる』なんてC4R1の基本じゃないですか】

坂本はヘルメットの中で横目になったのは、隣席のC2補佐、橘美晴少尉に向けてである。

【……悪い。自分の手で対処する癖が抜けてないんだな】

【お気持ちはわかりますけど、索敵も反撃も全部自分でやるって発想は捨ててください。そもそも生身をさらしているわけじゃないんですから。焦らずバディを頼りましょうよ、坂本少尉】

坂本はヘルメットの中で口をへの字に曲げた。自分の希望通り機甲部隊に配備されていたら、自分より年下の女の子にこまっしゃくれた口を聞かれるなんてこともなかったらうな、と思ったからだった。

ディスプレイ上に開いていたいくつかのウィンドウが、突如として砂嵐に見舞われたように乱れた。各分隊員の背に動揺が走るが、すぐ気を取り直して棟方に報告する。

【EMPジャマー発生。データリンク、遮断されました】

「指揮系統をレーザー回線にスイッチ。発生箇所をスキャンしろ」

【完了。上空のアジサシ群がジャミングの発生源を捉えました、映像送ります】

【目標確認。副次被害オブジェクト、周辺反応ネガティブ。攻撃可能。ハンターキラー活性化、自律攻撃モード】

スクリーンの片隅に別個のウィンドウが開いた。上空で旋回していたUAV群のうち一機――自律爆用無人攻撃機〈アジサシ〉からのカメラ視点が展開したのだ。

【自律攻撃モード、実行。命中まであと5秒……4……】

4階建てオフィスビルの屋上に設置された電波妨害装置を操作していた戦闘服姿の男たちが、弾かれたように上空を見上げた。その目が驚愕に大きく見開かれる姿が、みるみる拡大される。ブラックアウト。

断続的な機銃音やロケット弾の炸裂とはまた違う臓腑を揺さぶるような轟音が轟き、住宅街の一角から黒煙が立ち昇った。報道関係者だけでなく、警官やSAT隊員までもが不安そうに身じろぎする。

「……本当に空爆していますよ、あいつら」

「そりゃ、人命は金に替えられないのは確かだが……」呆れたようなSAT隊員の呟きに、神山は吐き捨てるように返した。「それにしても、景気よく撃ちすぎだ」

【EMP消失、データリンク回復。タゲリ1が敵熱源、複数を捉えました】

【進行ルート周辺の熱源多数確認。10、20……さらに増大中！】

正面ディスプレイ上の敵を示す赤い光点が、先ほどに倍する量に膨れ上がっていた。

【これはビルの屋上やベランダだけじゃないぞ……】

【ドラム缶サイズの〈ガスターヴァ〉なら、トラックの荷台や、極端な話、軽自動車の運転席に置けなくもないですからね】

【自動車爆弾ならぬ自動車砲台かよ……】

【路地の入り口だけでもいくつ設置してあるんだ……!?!】

「いずれにせよ、ここが敵の最終防衛ラインだ」

棟方は淡々と命じた。「システム歩兵はいったん下がらせろ。タギングを開始する。目標を振り分け、無駄弾を撃つな」

家族向けの軽自動車を納めていた小さなガレージのシャッターを貫き、重機関銃の火線が伸びる。道端に停まった運送会社のトラックの荷台からグレネードが発射される。屋上に設置された〈ヴァロータ〉から発射された迫撃砲弾が放物線を描き、自律特車群に襲いかかる。

自律特車群も負けてはいなかった――元より生身の歩兵部隊に先立ち、進撃ルートの「地ならし」がその主任務である。ここで火力を振るわずにいつ振るうのか、という思いは棟方以下、共有するまでもないことだった。

落下してくる迫撃砲弾に向けてアクティブ防御システムが作動する。レーザー照準と連動した射出機から打ち出されたペレット――発射と同時に膨張する柔らかい金属――は、砲弾ごとごとくを包み込み爆発させていた。棟方の指がタブレットをつつき、敵の発砲地点をタギングする。

小銃弾を放ち続ける民家の窓へ一機の〈アジサシ〉が弾丸の勢いで飛び込み、一瞬の後、破裂音とともに民家の窓ガラスすべてが割れて黒煙を吐き出す。立て続けに放たれたロケット弾は一発も重複することなくそれぞれの目標に向けて飛び、路地裏から銃弾を吐き続ける〈ザスターヴァ〉群をほぼ同時に粉碎した。

目前のレンガ塀から突如、轟音とともにオレンジ色の火線が一直線に伸びた。延長線上を走行していた自律特車が嵐に巻き込まれた空き缶のように一瞬で火花を散らして粉碎される。

【C1、1輛損壊！ 20ミリ以上の大型火器！〈ツィタデーリ〉です！】

【あんな小型要塞みたいな代物まで持ち込んでいたのか……】

【おそらく数週間以上前から、パーツごとに分解してガレージ内で組み立てたのでしょう。使い捨て前提とは言え、そこまでやりますか……】

「やるだろうな、『研究所占拠事件』と同じ連中なら」棟方の声に動揺はない。「被弾車輛はそのまま死んだふりをさせておけ。残りの車輛は応戦しつつ後退、間接照準で仕留める」

前方のガレージからは、濡れた紙のようにべろりと垂れ下がったシャッターの隙間から大型自律砲台〈ツィタデーリ〉の巨体が見えていた。象の鼻のように突き出された長大な砲身は装甲車輛に搭載されるような大口徑機関砲であり、筐体側面に取り付けられたコンテナ上の箱は対戦車ミサイルの発射装置以外の何でもなかった。本来なら軍港や航空基地の対地・対空警備用に設置されるような、自律式銃座というよりは大型砲塔に近い代物だ。自律特車群からの機銃掃射が装甲表面に無数の火花を散らしているが、内部機構までは届かないのか小揺るぎもしていない。

【タゲリ2、目標上空到達。レーザー照準開始……】

上空を飛ぶUAVのカメラがガレージ内に潜む〈ツィタデーリ〉の巨体を捉えた一瞬間、〈ツィタデーリ〉の上部装甲の一部が展開、蜂の巣のような内部構図を露出させた。次の瞬間、UAVの映像が砂嵐と化した。

【タゲリ2、反応途絶！ 撃墜されました！】

【アクティブ防御システムの応用ですね。無数の鉄球を撃ち出すだけの原始的な仕組みですが、そのぶん妨害はされにくい】

「そういう使い方もあるのか、覚えておこう」棟方は軽く頷く。「では、もっと高空から狙い撃つとしようか。穂摘少尉」

【……はい。チョウゲンボウの照準ポッド、目標捕捉。いつでも攻撃可能です】

「結構。ではとどめも君に頼んで構わないかね？」

【問題ありません、中隊長】

悠理の指がコンソール上を滑る。自律特車群のコントロールを一時的に離れ、別の大型火器へのデータ入力を開始したのだ。

広場の片隅に停車していた、一際異様な形状の車輛がゆっくりと長大な砲身を持ち上げた。周囲の警官たちが怯えたような眼差しを送る。

まるで細長い電極を二枚重ねたような奇妙な「砲身」が、過剰電流による高熱と、それを押さ

え込むための冷却剤のせめぎ合いでちりちりと微かに音を立て始めた。

他の自律特車とは比べ物にならない重量を支えるため、タイヤではなくキャタピラを履いた車体が、照準を微調整するために砲塔だけでなく車体まで一緒に身じろぎする。キャンピングカーのように連結された後部電源車までそれに倣う。

やがて微調整が完了した。「砲身」がぴたりと動きを停めた瞬間、ひっきりなしにちりちりと立てられていた音が一瞬だけ止んだ。

「砲弾」が射出された。発射音も派手な煙もなかったが、射出の反動とバックブラストまでは打ち消せなかった。弾道に沿って広場全体に積もっていた塵芥が凄まじい勢いで四方に吹き飛ばされ、警官たちがあわてて頭の活動帽を押さえた。

電磁加速砲——レールガン。

140ミリ徹甲弾は射線上に位置した3軒ほどの民家をたやすく貫通し、〈ツィタデーリ〉を炸薬でなく、その運動エネルギーのみでガレージごと粉微塵に吹き飛ばした。今度はアクティブ防御システムが作動する隙さえなかった。

【前方、目標の市民ホールに到達。敵熱源、建物内に多数】

「システム歩兵小隊、センサーグレネードで建物内の敵位置情報を送れ。こちらからタギングする」

【了解。敵位置送ります】

また別のウィンドウが展開し、敵の警戒ラインぎりぎりまで近寄ったシステム歩兵の一人が缶状の物体を投擲する様子が見えた。数秒後、メインディスプレイに市民ホールの立体映像がワイヤーフレームで展開。青いワイヤーフレームで描画される建物内を、赤く輝く人型が忙しげに動き回っている。

「センサーグレネードの導入が間に合ったのは不幸中の幸いだったね。今までだと自律特車の群れを建物内に突っ込ませるしかなかった。そのための部隊だろうと言われればそれまでだけど。今なら、敵をこれこの通り、丸裸にしてから掃討作戦を始められる。さて、どうする？」

振り返る棟方に、副官の奈良橋が即答する。「建物ごと撃ち抜きます」

強化外骨格を装着したシステム歩兵たちが、人間サイズの昆虫を思わせる動きで建物内に突入していく。集音センサーが対物ライフルの重々しい轟音と、分隊支援火器の連続発射音を共に捉え始めた。重機関銃に比べれば断続的だが、轟音とともにスクリーン上でうごめく赤い点——敵の熱源が一つずつ確実に消えていく。

【一方的な戦いになりましたね】

「一方的な戦い。結構なことじゃないか」棟方はいつもの腹の底を読めない笑顔で応える。「一つ一つの建物でいちいち銃撃戦をやっていたら、兵の数がいくらあっても足りないからね」

そしてモニターに向き直り、強固に見えた防衛ラインがコーヒーに浸した角砂糖のように崩壊していく様を見守った。

【こちらC1，正面玄関に到達。援護を】

【了解した、バディ】

C1補佐、宮迫小鈴少尉はヘルメットの中で唇をわずかに舐めた。自分が緊張していることは自覚している。敵最終防衛ラインに肉薄しているとなればなおのことだ。

正面の視界には建物内にごろごろとタイヤを転がして侵入していく自律特車と、その周囲に展開するシステム歩兵群が映し出されている。自律特車のボディへ完全に身を隠していないのは、対戦車兵器でも使われた場合に巻き添えを喰らいかねないからだろう。

宮迫は慎重に自律特車の操縦スティックを操作する。いかにも新興住宅地にふさわしい白く輝く瀟洒な廊下の床面を赤黒い液体が浸している。うつ伏せに倒れてぴくりとも動かない死体は、自衛軍システム歩兵の装備ではなかった。斥候に屠られた敵兵だろう。銃剣で背後から一突きされたらしい。我が軍もなかなか優秀な殺戮機械をお持ちじゃないかね、と声に出さず呟く。

階段を完全に上りきらず、マスト上の複合センサーだけ伸ばして上階の様子を探る。会議室のテーブルや椅子が乱雑に積み重ねられ、白濁した樹脂のようなものを丹念に噴きつけられている。工兵が使う速乾性の充填剤だろう。

舌打ちしそうになる。【しゃらくさいもん持ち込んでやがる。あれなら7.62ミリ弾なら余裕で止められる上に、ある程度の耐熱耐爆効果もある。バリケードごと吹き飛ばせれば楽だが、ロケット弾は威力がありすぎる。どうする】

【12.7ミリ弾なら貫通するわ。それに、バリケードごと吹き飛ばすのは悪い方法ではない】相棒の、伶俐な横顔を連想させる涼やかな返答が返ってきた。【擲弾、弾種選択。FAE】

【麻痺モードで？】

【いいえ、完全無力化で】

ヘルメットをかぶった横顔が見えるだけだと承知していながらも、宮迫は傍らの相棒に目をやりそうになった。【死体は黒幕も情報源も吐かないんじゃないかな】

【万に一つでも反撃の可能性は摘んでおきたい。死体と瓦礫の中から弱々しく撃ち返してくる生き残りだって、歩兵には充分脅威なもの。それに背後関係を明らかにするのは私たちではない】

それはそれで筋が通っている、と宮迫は思い、今回は相棒の意見を優先させることにした。随伴するシステム歩兵小隊長に正面玄関まで後退するようテキストメールを発信。同時に兵装スティックを操作し自律特車のウェポンステーションを手動に切り替える。

FAE——燃料気化爆薬は風の強い屋外では使いづらい兵器だが、空気の動かない屋内では十分に効果を発揮できる。宮迫はレーザー測距機でバリケードまでの距離を計算、トリガーを引いて数発の擲弾を撃ち込んだ。

擲弾の弾頭から噴霧された可燃性の爆薬がフロア全体に広がり、次の瞬間、引火した。

爆風の直撃を受けないよう自律特車は階段下にまで後退させていたが、それでも凄まじい爆風が押し寄せてきた。ノイズキャンセラーが作動しなかったら鼓膜が破れていたかも知れない。

爆風がひとしきり治まった後で、自律特車をゆっくりと前進させた。廊下を塞いでいたバリケードは跡形もなく、机や椅子の破片が壁にも床にも天井にも深々と食い込んでいた。据えつけられていた機銃がまるで飴細工のように半ばからねじ曲がっている。くしゃり、と自律特車のゴム

タイヤが何かを踏みつけた。カメラを向ける。焼きすぎて炭化した手羽先のようなそれは、肩のあたりからもげた人の腕だった。

ふと気づくと、断続的に響き続けていた銃声が聞こえなくなっていた。

【……終わったのか？】

【おそらくはね】

悠理の声にかぶせるように、背後でディスプレイを見つめていた棟方が室内の全員に向けて声を発した。「非常口から侵入したシステム歩兵小隊が敵の掃討を完了。現時刻を持って作戦行動を終了する。皆、ご苦労様でした」

市民ホールの正面玄関から、女性警官に先導されて監禁されていた人々が次々と連れ出される。銃痕も生々しい戦闘の跡と、破壊された街並を前に、嘆くことさえ忘れた人々の溜め息とすすり泣きが夕闇の街に静かを流れていく。

やりきれない表情でそれを見ていた神山の傍らに、小柄な影が立った。「お疲れ様です」

「ずいぶん派手にやったものだな」自分でも大人気ないとは思ったが、あの凄惨な戦闘の片鱗も見せない男に対して、目つきも声色も冷たくなるのを抑えることはできなかった。

「人質より犯人の命を重く見ることはできない、とは先刻申し上げた通りです。それにこう言っただけでは何ですが、警察やS A Tが独力で事件を解決できたのならば、私たちには何の異存もありません。むしろ、私たちの出動が『なし』で済んだことに安堵したでしょう」

神山は大きく溜め息をついた。「これからはああいうものも必要になっていくってのはわかる。だが、全面的に頼っておいてなんだが、俺は気に入らん。何というか、見ていると黙示録的な気分になる」

「『敵の刃は己に当てず、己の刃のみ敵に当てんと身をよじり七転八倒する術理』——それが戦術なり、兵器なりと呼ばれるものの本質ですから。美しさや潔さからは遠く離れたものになることは避けられません。無人兵器は、その本質があまりにも露骨すぎるから嫌われるのでしよう」

棟方は穏やかな眼差しで神山に向き直った。「おかしいとは思いませんか、神山隊長」

「何がだ？」

「犯人たちのやり方ですよ。不謹慎を承知で言えば、彼らがもっと人質を積極的に——失礼、盾として活用していれば、私たちももっと慎重な作戦行動を余儀なくされたでしょう。たとえば人質を自律銃座にくくりつける、あるいは人質にまぎれて発砲してくる、とかね。実際、私たちの最大の懸念はそれでした。それならそれでやりようはありましたが」

神山はあんな連中の一味なのか、と言わんばかりの眼差しで棟方を見た。「……仏の柄は割れていないが、おそらく腐っても軍人だからだろう。民間人を巻き込むような汚い手段をよしとしなかったか」

「そこです。どうしてよしとしなかったのでしょうか？ まるで彼らが僕らの保有する火力と運用に合わせて、それを最大に発揮できる状況をお膳立てしてくれたみたいじゃありませんか」

何かを言い返そうとした神山は、ふと前方の指揮通信車のハッチがわずかに開き、足音もなく

一つの人影が滑り出てくるのを見て口を閉ざした。

見覚えのある女性士官の姿、穂摘悠理少尉だった。小脇に奇妙な形状のヘルメットを抱え、夕暮れの微風に髪をわずかにそよがせている。破壊された街並をすべて視界に捉えるかのような、それでいて何も見えないような眼差しが、なぜか強く神山の目に焼きついた。

失礼、と傍らの棟方が踵を返した。飄然としたいつもの彼とはどこか違う、急くような仕草だった。

「棟方中佐……このままだとあの娘、潰れるぞ。それともあんた、嫁入り前の娘に『殺し屋』なんて仇名をつけさせたいのか？」

「あなたのおっしゃっていることは彼女の職務とその姿勢に対する侮辱でしかない。聞かなかったことにしておきますよ、お互いのためにもね」

「中佐」

呼びかけたが、棟方の歩みは止まらなかった。なぜかそのまま行かせてはならない気がして、神山はもう一度呼びかけた。「棟方志郎中佐。あんた一体、何と戦うつもりなんだ？」

「なかなかいい線行ってますよ、神山隊長」

棟方は振り返り、周囲の警官たちが何事かと目を見張るような一部の隙もない敬礼を行った。そして再び歩き出し、一度も振り返らなかった。

棟方は悠理の前に立った。黒い瞳が目の前の棟方に焦点を合わすまで、やや間があった。

「中に入りたまえ。君はああいうものをまっすぐ見すぎるべきではない」

「……はい」

悠理は何かを言いそうになったが、結局口をつぐんだ。2人はそれきり黙って車内に消えた。圧縮空気の音とともに後部ハッチが閉じ、黒々とした口が2人を飲み込んだ。

不幸中の幸いというべきか、最初に射殺された警備員を除き、人質の中に死傷者は発生しなかった。犯人グループは最低限の見張りを立て、一箇所に集めて監禁したのみだった――ある意味、彼らは最初から最後まで、人質には徹底して無関心だった。

「ここへ来てよかったことって言ったら、シャワーヘッドかな」

シャンプーを手に取りながら、宮迫はシャワーヘッドを指先で弾いた。硬質な音に、右隣のブースでシャワーを浴びていた美晴が顔を上げる気配を感じる。

「シャワーヘッド？」

「以前の風呂がぼろくってさ。何しろ毎日使う代物だからね。案外、そういう細かいところから精神的にじわじわ来るんだ。水回りの予算をけちる任地に明日はないね」

「そんなもんですかねえ……私の住んでいたところは、どこもぴかぴかでしたよ」

「へえ。どこのお嬢様部隊だよそれ」

宮迫はシャンプーのボトルを思い切り握り締めた。シャンプーが綺麗な放物線を描いて仕切りの向こうに降り注ぎ、悲鳴が上がる。

「み、宮迫少尉！ シャンプーの雨が！ 雨が！」

「ああ。イラッときたからね」

「もお！ なんでそんな意地悪するんですか！」

「ああ。イラッときたからね」

「言い訳まで省エネ化しないでください！ 泣きますよ！」

「泣けよ」

「もうっ」

水音混じりに吐息が聞こえ、しばらく二人は無心に髪を洗い続けた。

「……きつかったな」

「……きついですよ。これでもう今月へ入ってもう三件目。それも今日は、ひさびさの非番の日にいきなり緊急招集ですよ。いろいろ買い込むつもりが、予定めちゃくちゃ……」

沈黙。湯の流れ落ちる音。

「……なあ」

「はい？」

「この三ヶ月を考えるとさ……何だかあたしは陰謀論者みたいな気分になってくるんだ」

「ネットでよく言われてる、軍の自作自演とかそういう話ですか？」

「そりゃいくら何でも頭悪すぎると思うけどさ。とりあえずは軍も警察も機能している一応の法治国家で、あっちでもこっちでも派手なドンパチが起こって、しかもそれがお互いまるで無関係だったら、そっちの方がおかしいだろ。どっかの無政府国家じゃあるまいし」

「今日の〈敵〉と、〈ヴィヴィアン・ガールズ〉と、何かつながりがあるってことですか？」

「仲間かどうかはともかく、まったく関係なくはないと思う。ただの勘だけだね」

「確かに……穂摘少尉の部隊が襲撃を受けたのも、今日みたいな事件が増え出したのも、最近ですもんね」

「どうなってるんだろうな」

「どうなってるんでしょうねえ」

沈黙。湯の流れ落ちる音。

「……なあ」

「はい？」

「なんかさっきから違和感あると思ったら、穂摘からのツッコミが全然なかったんだよな」

「そう言えば……いつもだったらもっと早く『二人とも静かにして。子供じゃないんだから』って一発飛んできてますよね」

「まさかのぼせて倒れてるってことはないよな……穂摘？」

「穂摘少尉？」

宮迫は左隣を向き――そこですりガラス越しに、悠理のシルエットを見た。

彼女は壁に手を突き、微動だにしていなかった。唇は動き、何かを呟いているようだったが、そこから聞こえる声はシャワーの音に紛れるほど切れ切れで、小さかった。

「……そりゃ、修行僧ごっこかなんかかい？ 穂摘少尉？」

「少尉？ 私たち、そろそろ先に出ちゃいますよー？」

二人の声に悠理はわずかに顔を上げたが、シャワーの湯気と、顔に張り付いた髪とで、その表情はまったく見えなかった。

「……足りない」

「え？」

「まだ、あの人には届かない。……河村先生を待たせると悪いから、先に出るわね」

悠理はシャワーのコックをひねり、湯を止めた。そしてあっけに取られている二人を残し、瞬きするほどの間に浴場を出てしまった。

数秒ののち、ヘチマを手にしたままで美晴が口を開いた。

「……よくわからないけど、ここへ来た時より思い詰めた感じじゃないですか？ 穂摘少尉」

「なんか……いろいろと溜め込んでるよね。ここに来た時よりは口数が多くなったと思ってたんだけどな……何に悩んでるのか、肝心のところはだんまりだ。家族のことだけでもなさそうだし」

「宮迫少尉にも話さないんですか？」

「バディだから何でもかんでも話せるってことはないだろ。話したくっても話せない類のものならなおさらだよ。……それにしてもお前、身体洗うのにスポンジじゃなくてヘチマ使うの、お洒落臭くって嫌味だな。橘のくせに」

「突っ込むのそこですか!? あと『橘のくせに』って、私のび太君並みの扱い!？」

「安心しろ、並みじゃない。未満だ」

「もうっ」

「これからする質問には、あまり構えないで答えてください」

医療カルテを表示したタブレットを手に、女医――河村忍は微笑む。飾り気のない白のブラウスに地味な焦げ茶色のスカート、その上から白衣。足は組まず、綺麗に膝小僧をそろえて座っている。同性である悠理の目から見ても魅力的な座り方だ。短期間のカウンセリング教育を受けた

だけの自衛官ではなく、民間のカウンセラーから軍に招聘されたという異例の経歴の持ち主。しかも過去には棟方志郎とともに半島へ赴き、深刻なPTSDに苛まれる将兵のカウンセリングも担当したと言う話も聞く。銃こそ撃ってはいないものの、彼女もまた「実戦経験者」として畏敬の眼差しを浴びている。口さがない噂もないではないが、少なくとも本人に気にした様子はない。

決して暇ではないはずだが、時間を惜しむような素振りは一切見せずに、最近の映画や小説など当たり障りのない世間話から始める忍に、悠理は好感を抱いていた。同じ自衛軍で働く女性として、自分よりある意味遥かに困難な職務をこなす姿を尊敬もしている。

だがそれでも、悠理は今ひとつ忍に気を許せていない。彼女はカウンセラーであると同時に自衛官であり、悠理に対する各種の指示を「上」から――それも、直属の上官である棟方を通り越して――受けているふしがあるからだ。

微笑を絶やさず、忍は振り返った。薄紫のシュシュで束ねた髪がさらりと肩を流れる。

「さっそくだけど、最近、何か体調に変化はありましたか？」

「いいえ」

「夢を見てうなされたことは？」

「うなされたことはありませんが、夢を見たということだけは覚えています」

「怖い夢ですか？」

「いいえ。ただ夢を見た、ということしか覚えていません」

そう、と頷きながら忍はタブレットに診察内容を入力していく。

「先生。差し支えなければ、先生は私をどう診たのか教えていただけますか？ よいのか、悪いのか」

少々意地悪な質問であることは悠理も承知していた。病気や怪我ならともかく、心の有り様を「よいか悪いか」で聞かれても、医師も困るだろう――だが悠理の方も、インフォームド・コンセントがあるでしょう、という気分ではある。

もっともこのカウンセリング自体、自衛軍が少なくとも現代の軍隊として将兵を扱っていますよ、という姿勢の一端ではある。旧自衛隊時代はメンタルヘルスの軽視が甚だしく、心を病んだ隊員に早期退職を促すことさえあったそうだ。とは言え、今は自分のあずかり知らないところでモルモット扱いされる可能性がでてくるわけだけど、と悠理は思う。

「よいのか悪いのか、ねえ」忍の笑みが少し困ったようになったが、快活な声の調子は変わらなかった。「本当に話して差し支えないところだけ言うと、心身ともに健康そのものよ。多少、解離の傾向が見られる以外は問題なし」

「……解離、ですか？」

心理学用語らしい、という見当はつくが、悠理にはさっぱりである。

「自分の精神と行動がかけ離れたように感じる精神状態のこと。たとえば離人症と呼ばれる解離では、自分に起こっていることを自分のものと考えられない精神状態に陥る。時と場合によっては命に関わることだから無視はできないけど……穂摘少尉の場合、日常生活に支障がでないレベルのものですから安心してください」

はあ、と悠理は間の抜けた返事をしてしまう。「でも、どうしてその傾向が私に？」

「思春期の頃なら、自分の身体が自分のものに思えない、という経験はよくあると思うけど...
...あるいは一種の防衛反応、かしら。あまりに凄惨な光景を目にした場合、これは現実のものではない、と無意識に思い込もうとするの」

「.....そういうことですか」

わずかに――ほんのわずかに、顔から血の引く感覚があった。

「正直なところ、戦場が人の心にどのような影響を与えるかは、まだわかっていない場合が多いの.....特にあなたたちのような、無人兵器を扱う専門の兵科の場合は。快適なオフィスと、モニター越しに見える凄惨な戦場のギャップに耐えられなくなる。それまで何の問題もなく任務を遂行していたオペレーターたちが、急に日常生活が困難になるほどの精神疾患に見舞われる.....無人兵器の先進国であるアメリカでさえ、その問題が完全に克服されたわけではない。だから何か違和感を覚えたら、どんな些細なことでもいい。私に相談してください」

悠理は頷いた。彼女が医師としての使命感に基づいて行動していることに疑いはなかった。だがもう一つの可能性についても忘れることはできなかった――彼女は医師と同時に自衛官であり、上官には絶対服従が基本姿勢であるからだ。

「隠しても仕方がないことだから言うけど.....『上』からは何があってもあなたのメンタルを維持しろ、と言われているの。何があっても。本当に、何があっても。それこそ薬を使ってでも」

「.....感謝するべきなんでしょうね、そのご配慮には」

どんな「薬」を使うつもりだったんだろう、と思うと、乾いた笑いが口から漏れそうになった。

自分は以前と何一つ変わらず日々の職務をこなしているだけなのに、軍の方で勝手にすり寄ってくる。放っておいてほしくとも、皆が悠理を放っておいてくれない。ずぶの素人を一人前の歩兵にするまでには戦闘機一機分の費用がかかるというが、この調子だと自分に向けられた費用はずいぶんと高騰しているのではないか。航空母艦一隻分ぐらいにはなっているだろうか？

そしてふと思う。――「あの人」もまた、こんな気分を味わったことがあるのではないかと。それも数え切れないほど。

「.....一つ、聞いていいですか」

「どうぞ」

「先生は、棟方中佐と一緒に半島へ行ったのですかね？」

「ええ。その時は自衛官としてではなく、NPO法人の一員としてだったけど」

「どうやって耐えたのですか？」

女医は一瞬口ごもった――だが、それは本当に一瞬だけだった。「耐えた覚えはないわ。きっと、棟方中佐に聞いてもそう言うでしょうね」

「中隊長殿は、俺たちが知っている以上のことを知っているんじゃないかな」

「はん？」

休憩スペースのベンチに座って缶コーヒーを傾けていた坂本剛司が唐突に口を開いたので、宮

迫小鈴は思わずスポーツ飲料を飲むのを止め、そんな声を出してしまった。

「何よ？ あのおっさんがすべての黒幕だとでも？」

「じゃなくてよ」

坂本は壁の一点に集中するような目つきになった。考えている時の癖だ。「すべてとまではいかななくても、あの連中の正体やら目的やらについて、だいたいの検討はついてるんじゃないかって話だよ」

「確かに……『研究所占拠事件』以来、警察は軍に借りを作りっぱなしだもんね。それもそうそうは返せないようなでっかい借りを」

「軍というか、棟方志郎と愉快的な子分たちにな」

「警察が自前の無人機部隊を作るにはだいぶ時間がかかりそうだし、何より自律特車群とシステム歩兵群の連携行動の威力をこれ以上はないほど見せつけた……か。不謹慎を承知で言えば、一番得をしたのはあの人ひとりだけってことだ」

「今なら『ちょっとは予算増やしてよ、いーじゃんそのくらい』とか言っても、まず跳ねつけられないと思うぜ」

「棟方志郎の野望……まあそんなものがあればの話だけど、今のところ順調に進みつつあるわけだ」

宮迫はスポーツ飲料のキャップを締めた。「で、だから？」

「だからって……別に文句もないさ。ただ、ちょっとそう思っただけだよ」

宮迫は肩をすくめた。「じゃあ、今の話は他所でしない方がいいね」

「何だよ？ 酔っ払って車ごと河に落ちるからか？ 俺、車の運転どころか乗るのも駄目なんだぜ知ってんだろ」

「そこまでは言わないけどさ。『隠された真実』とやらがあるとして、だから何？ それを見つけたところで誰が得すんの？ ってだけの話よ。むしろあたしは、中隊長殿が何も話さないのはあの人なりの親心なんだ、って解釈してるけどね」

「そうなのかなあ……」

「それもあたしの勝手な想像だけだね。どのみちあたしらは宮仕えの身。粛々と国民に奉仕するだけだって」

「わかったよ。……そろそろ戻るか」

坂本は屑籠に飲み干した缶を放り投げた。狙いは外れ、壁に当たって跳ね返る。

「下手くそ」

「うるせ。……あれ、あの二人は？」

「ほづみんは河村先生のところ。みはるんなら、とっくに報告書を作成して帰ったよ」

「その女子大生みたいなネーミングなんなんだよ？ いや、別にいいけど。……穂摘はともかく、あの戦闘こなしした後で書類作って帰るなんて、仕事早えな。あ、俺らが遅いだけか」

「一人突っ込みご苦労さん。さ、あたしらもさっさと仕事して帰ろう。戦闘ログの整理だけでもこなしておかないと明日以降が辛いよ」

「つくづく宮仕えは辛いな……」

『……なるほど、ご苦労だった』

携帯ゲーム機に偽装した通信機を使い、秘匿回線を通して「報告」を行うと、橘美晴は深々と溜め息をついてみせた。「すみませんが、今日はもう休ませてもらいます。最近は公私ともにこき使われっぱなしで」

皮肉に気を悪くした様子のない、含み笑いの気配が伝わってきた。『すまない。何しろ棟方中佐に引き抜かれるだけの技能を持ち、しかも余計な〈紐〉がついていない人間となると、君以外にいなかったものでね』

「おまけに係累もないから、駒としては最適ですよ」

天井を向いて、溜め息。「でもあのおっさん、思っていた以上に曲者ですよ。もしかしたら私の素性もとっくにバレてるかも」

『それならそれでかまわない。彼の目的には我々の目的と合致している部分も確かにあるからね——ただ、目の届かないところで勝手に動かされては困るというだけだ。彼に背後の『目』を意識させておくのも、君の任務の一つなんだよ』

「はあ。『監視することに意義がある』ってことですか」

『そういうことだ。とにかく、当面の間は目を離さないでおいてくれ』

「最後に一つ。……〈白い男〉って何なんですか？ 最近やたらと聞く言葉ですけど、それを聞いただけで発狂しそうな人が私の知っているだけで5、6人以上いるんです」

それだけは聞かれたくなかった、と言わんばかりの苦い声が返ってきた。『君は知らない方がいい。軍事諜報の世界だけでも君の手には余るだろう。この上、自分からオカルト伝奇小説の世界に首を突っ込む必要はない』

「結局、教えてはいただけないんですね」

『君のために言っているんだ。この世には知っただけで命に関わる情報があるなんて、今さら言うまでもないだろう』

通話を終えてから、美晴は溜め息をついてもう一度天井を見上げた。無意識のうちに呟く。

「……空自。中国国家保安部。高麗統一連邦・国家情報院。米特殊作戦軍。〈うつろな男たち〉。〈ヴィヴィアン・ガールズ〉。……メアリ・バーキンズ」

呟いているうちに、無闇に腹が立ってきた。

「……どいつもこいつも、あの女のことばかり」

自分でも嫌になるような、陰鬱な呟きが漏れた。

報告書と申請書と始末書の山に囲まれながらキーボードを叩いていた棟方は、ふと傍らに気配を感じて顔を上げた。

手を伸ばせば触れられるほど近く、〈白い男〉——モーリッツが立って、微笑んでいた。ドアも窓も施錠され、物音一つ立てていなかったが、棟方は驚かなかった。いつだろうと、どこだろうと関係ない。気がつけば彼はそこにいる、と遙か昔に思い知っていたからだった。

棟方はモーリッツを見つめた。あらゆる表情の消えた顔で。

モーリッツも棟方を見つめた。会いたくてたまらなかった旧友を見つめるような優しい笑顔で

。 ややあって、棟方は口を開いた。

「もう少し、待っていてくれ」

モーリッツの微笑は崩れない。構わず、棟方は続けた。あらゆる表情の消えた顔で。

「もう少しで、君を殺せるよ。モーリッツ」

声を立てず、〈白い男〉は笑った。心底嬉しそうに。

穂摘悠理はいつも同じ夢を見る。物言わぬ死者たちの夢を。

そこには首が半ばから断ち切られた小野勝中佐と、頭部を大口径弾で吹き飛ばされた石井成美と、胸に三角錐のような金属片が突き刺さった寺島良子が立っており、その傍らには悠理がその手で殺した〈ヴィヴィアン・ガールズ〉の少女たち、全身を機銃弾で引き裂かれた少女や、手足を吹き飛ばされた少女たちが立っていて、これから悠理が殺すことになる無数の死者たちとともに悠理を見つめている。

死者たちは何も言わない。顔のない者や頭部そのものがない者たちも、皆ただ黙って悠理を見つめている。物体へと還った者たちの眼差しには怒りも恨みも哀しみもなく、それがよりいっそう彼女の心を締めつけるのだ。

――悠理は薄闇の中で目を見開いた。枕元の時計は午前3時半。夜半から降り出したらしく、大粒の雨が窓ガラスを濡らしている。雨音と、強風が窓ガラスを鳴らす音以外、物音はない。

最近、この時間に目覚めることが多くなった。自分でも不思議な気がする。子供の頃から両親に笑われるほど寝つきはよかった。軍に入隊してからも激務のおかげで、目を閉じた途端に朝になっていることがほとんどだった。夜中に目を覚ますことなどなかったのに。

悠理は頬に触れ、指先が微かに濡れるのを確かめる。それが夢のせいなのか、また別の精神の有り様によるものなのか、彼女にはわからない。

Closed Field

<http://p.booklog.jp/book/88200>

著者：井田和樹

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shadowontheida/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88200>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88200>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ